

送り火

令和2年8月第3週放送

送り火は、別れの炎です。

喪った大切な人は、生前の姿ではもう帰ってきません。その事実を受け容れることは、とても難しいことです。もう一度会いたい、もう一度語り合いたい。そういった思いが湧き上がってきます。

そのような思いを抱く人にとって、お盆の日は、とても得がたい時間です。亡き人と共に過ごす日々だからです。大切な人ともう一度出会うことができるのです。そのため、迎え火を焚く時には、「あの人が帰ってくる」という、どこか喜びの気持ちを覚えるものかもしれません。

遠くから来た客人をもてなすように、盆棚を設け心づくしの品をお供えし、お灯明をともし、お線香の香りを手向け、数日の間、亡き人と過ごします。

もちろん、大切な人の生前の姿を見ることはできません。共に過ごすという思いが大切なのです。自分の心と、亡き人の心の交流が、お盆の日々になされるのだと思います。それはきっと濃密な時間となるでしょう。

送り盆の日がやってきます。そして、いよいよ別れの時です。迎え火を焚く時に感じられたうれしい気持ちは、きっと切ない気持ちに変わっているでしょう。もう少し一緒にいたいとい

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

う気持ちもあると思います。しかし、見送らねばなりません。

「いとせめて 送り火明く 焚きにけり」

明治期の俳人、長谷川 ^{れいよし} 零余子の句です。

別れなければならないのなら、せめて送り火を一層明るく焚いて、あの人が行く道を照らしたい、という思いが伝わってきます。

京都の五山の送り火や灯籠流しなど、送り火に大きな行事が多いのは、この句にこめられた思いを、多くの人が抱いたからではないでしょうか。

お盆は、亡き人と出会い共に過ごし、そして再び別れる行事です。そして、それは毎年巡ってきます。生前のその方との出会いと死別を、大きな出会いと別れとするならば、お盆は小さな出会いと別れです。

小さな出会いと別れを繰り返すことで、私たちは亡き人の死を受け容れ、亡き人を新たに心に生かしていくのだと思います。

そのためには、送り火を一層明るく焚いて、大切な人としっかりと心をこめて別れなければならないかもしれません。

また次の年に、出会うために。

— 終 —